

# 新刊紹介

山岸良一文・さかいひろこ絵

『親子でまなぶ たのしい考古学』

松尾 光

本書の本文を著された山岸良二氏は、前方後円墳の前身・淵源として当時脚光を浴び解明を期待されていた方形周溝墓<sup>ほうけいしゅうこうぼ</sup>について、三十歳という若さで『方形周溝墓』(ニュー・サイエンス社)を刊行し、考古学研究者に精確で完備した基礎データを広く提供した俊英としてつとに知られている。その後も弥生時代の墓制や独鈷石<sup>どくこいし</sup>を軸とした研究を進めながら『関東の方形周溝墓』、『原始・古代日本の墓制』、『原始・古代日本の集落』、『原始・古代日本の祭祀』(以上、同成社)などの学術研究書を編まれ、また日本考古学協会委員・理事を務めて学界・学徒を身をもって導いてこられている。そうした専門家としての顔の一方で、考古学の普及・発展に努められ、『縄文人・弥生人101の謎』(新人物往来社)、『入門者のための考古学教室』(同成社)、『日曜日の考古学』(東京堂出版)などを出版されてきた。本書もそうした啓蒙・普及活動の成



2018年7月31日発行  
同成社  
A5判 168頁  
定価 本体1,700円+税

果の一つであるが、いままでの経験を踏まえた工夫もなされている。

本書は以下のように、前後に「はじめに」と「おわりに」を置き、その間に「第1話」「第2話」というように二十五の興味深いタイトルを掲げた著述が区切られずに並べられている。

- はじめに 考古学ってどんなことを研究するの？
- ①今もナゾにみちたエジプトのピラミッド
- ②縄文土器は世界でいちばん古い土器？
- ③縄文人は何を食べてた？
- ④日本人はどこからやってきた？
- ⑤中国最初の皇帝 秦の始皇帝の巨大な墓
- ⑥銅鐸や銅剣は何に使われた？
- ⑦弥生時代のいろいろな墓
- ⑧日本で最初のクニ「邪馬台国」はどんなクニ？
- ⑨アジアの原人は日本人の祖先？

⑩古墳ってなんなの？

⑪古墳の周りになぜハニワを置いた？

⑫高松塚古墳になぜ絵が描かれてた？

⑬古代日本と関係の深い百濟 武寧王陵のナゾ

⑭法隆寺はほんとうはいっ建てられた？

⑮日本でいちばん古いお金は？

⑯平城京はどのくらいの大きさだった？

⑰大噴火にうもれた古代の都市ポンペイ

⑱信長や秀吉の城もわかってきた！

⑲江戸時代の町や村も発掘されてる

⑳発掘される明治・大正・昭和

㉑密林のなかに発見された大仏教寺院アンコール

ワット

㉒発掘調査ってどのようにやるの？

㉓今から何年前ってどうしてわかるの？

㉔むかしの人はどれくらい遠くまで移動してた？

㉕考古学によって地震の予測もできる！

おわりに 考古学はこんなにおもしろい

以上の二十七篇である。便宜的にかつ大雑把に分けると、I ①～⑪が原始から縄文・弥生時代をへて古墳時代までの、II ⑫～⑰がほぼ飛鳥時代以降の、III ⑱～㉑が中世以降近代までの、IV ㉒～㉕が時代横断のテーマとなっている。内容としては、きわめて広範囲な時代に話題を

亘らせるとともに、⑪の埴輪の配置、古墳群と墓の主、天皇と陵墓との関連性など、おのおののテーマの最新の研究状況に注意を払ってもある。

考古学といえば、日本人が日本文を書き記す文字を持っておらず、そのために政治制度・社会経済から行住坐臥のすべてに亘って記す文献が存在しない時代を扱うものと思われてきた。だから旧石器時代から古墳時代ごろの実相を探る学問とみなされ、文献史料のある時代では歴史学の補助学と位置づけられてきた。とくに室町時代や江戸時代ともなれば、文献史料や絵画資料によるイメージで十分に実相に迫り得ていて、考古学の扱う時代でないかのような先入観がある。

しかし、いまの考古学はそうした理解を超えている。本書の⑱で取り上げられた越前朝倉氏の一乗谷で復原された町並みは驚きをもって紹介され、安土城本丸で見つかった清涼殿と同企画の殿舎址は信長と天皇の関係をめぐる新たな議論を呼び、青森の十三湊とさみよの町を拠点とする安東氏の日本海交易の盛衰は目に見えるものとなった。⑲の島原の乱の舞台となった原城はらしろの破壊ぶりと埋葬された戦死者や東京都江東区の旧一橋高校跡地で出土した性病痕のある一般庶民の姿からは、戦国・江戸時代の文献より厳しい惨状が看取れる。さらに⑳の明治時代の新橋ステイション転車台てんしんたいの話や

原爆ドームなどの戦争遺跡にまで話が及び、考古学が現代社会を対象として成果を出していることが如実にわかる。そもそも文献史料は書記者の認識というフィルターを通しており、書かれていることがその通りの事実・実態だったとは限らない。また日常生活も、関心事となりにくい。そうした実態的研究を考古学がリードしていく日の近いであろうことが、否応なく理解できる。

さて、本書にはほかの書にない工夫がある。ふつう子ども向けには子ども専用の本があり、大人は大人向けに書かれた本を読む。それが本書の場合、各テーマの最初に子ども向けの記述があり、ついでやや字を小さくして親向けの記述がなされている。㉓でなら子どもにはC14や年輪年代測定法の話でとめて、親にはさらに詳しく金属製品の産地分析などの話へと深めているし、㉔では子への貝塚の話にはじまって、円形遺構という繋がりにから親には環状列石・環状木柱遺構などへと話を発展させている。つまりまずは子どもに読ませ、ついで親が子の理解力や関心を持った事柄にあわせて、話を掘り下げたり周辺の話に広げつつ語り合っているようにしてある、という企画である。本書タイトルの「親子でまなぶ」というのはこうした意味だったわけで、同じ一冊を親子がいっしょに楽しめるというってもよいし、一冊をまずは

親が、ついで子が読んで二度味わえるといってもよい。年齢も理解力も異なる読者を想定した便利な本で、よい企画を考えつかれたと思う。

ここまでは日本の考古学についての書として紹介してきたが、本書のどこどころには世界の考古遺物・遺跡の話として、①でピラミッド、⑤に秦の始皇帝陵、⑨に猿人・原人・旧人、⑬に百済くだらの武寧王陵、⑰にイタリアの都市遺跡・ポンペイ、⑱にカンボジアの仏教寺院遺跡・アンコールワットが取り上げられている。日本の墓制や都市などとの比較のための関連記事という記述でもあろうが、目の前にある日本の考古遺物に興味を持たせるだけでなく、子の目を広く世界にまたより大規模で特異なものに向けさせたいとの配慮だろう。自分の国の歴史を理解するだけでなく、世界のなかの日本の歴史として理解すること。日本と同時代の世界についての広い視野と足もとの日本の遺跡を深く観察する確かな目を二つながら備えた子への成長を期待する著者の強い思い入れがあつての構成と思う。

著者撮影の写真も多く、さかいひろこ氏の絵も楽しい。ぜひとも、親子での一読をお勧めしたい。

(まつお ひかる 早稲田大学エクステンションセンター講師)